

第9節 シズカ塚古墳の検討

ここでは、ベンショ塚古墳の南東約400mに位置するシズカ塚古墳について検討する。

シズカ塚古墳は、『大和國古墳墓取調書』では「シズカ塚」としてみえ、「奈良市史 考古編」によると東西約17m、南北約16m、高さ約2mの方墳として測量図（図64左）とともに紹介されている。しかし、埴輪や葺石の有無すら不明であり古墳であるのかさえ判然としなかつた。

今回報告する埴輪は、下記の通りの経緯があり、シズカ塚古墳に伴う資料であることが間違いないものである。したがって、その詳細を報告しシズカ塚古墳を帶解地域の古墳時代のなかに位置づけて評価したい。

第1項 墓表採の経緯

河内一浩の野帳No.217に2007年4月14日付けの踏査記録と採集地点の略図がある（図64右）。踏査当日の経路は、天理市和邇町周辺古墳見学後に奈良市帶解の黄金塚古墳から北浦定政の墓所へ移動の際に同市山町の集落で、木が茂る高さ約2mの高まりを見つけている。周囲の道路が緩やかにカーブをすることから、直径20m程度の丸い塚として記録している。塚の周囲は削

られ、さらに塚の東側を削って平坦地を造成し、そこに宝篋印塔が建てられている。資料は、石塔西側の崖の上面で15点ほどの破片を表採したものである。また、塚の上には川原石の存在は確認できなかった。

帰宅後、『奈良市史』で確認したところ塚が“シズカ塚古墳”と呼ばれる古墳であることが分かった。

その後、長らく河内のものとて埴輪が保管されてきたが、奈良市埋蔵文化財調査センター令和3年度秋季特別展「帶解の古墳時代とワニ氏」を見学の際に、村瀬と雑談するなかで、上述の踏査経緯を伝えることとなった。そして、野帳および埴輪資料の所在を確認し、2021年10月4日に以下で報告する表採埴輪を奈良市埋蔵文化財調査センターへ寄贈した。

第2項 墓表採の報告

表採資料の来歴は、よほど記録等がない限り発掘調査出土資料と同列で扱うことは難しい。しかし、河内による踏査記録はシズカ塚古墳の位置関係や形状を正確にとらえており、シズカ塚古墳で表採したものであることが確実といえるものである。よって、ここで報告する埴輪はシズカ塚古墳に伴う資料と評価して問題ないと考え

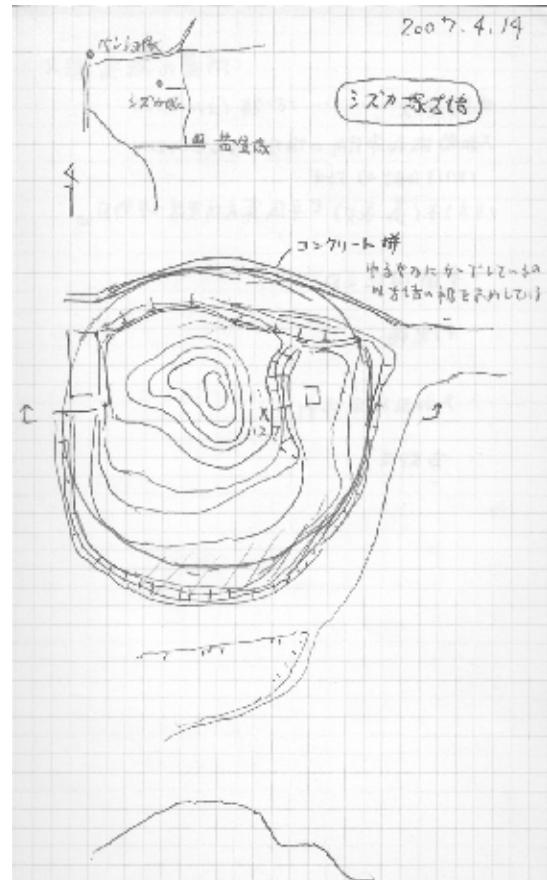
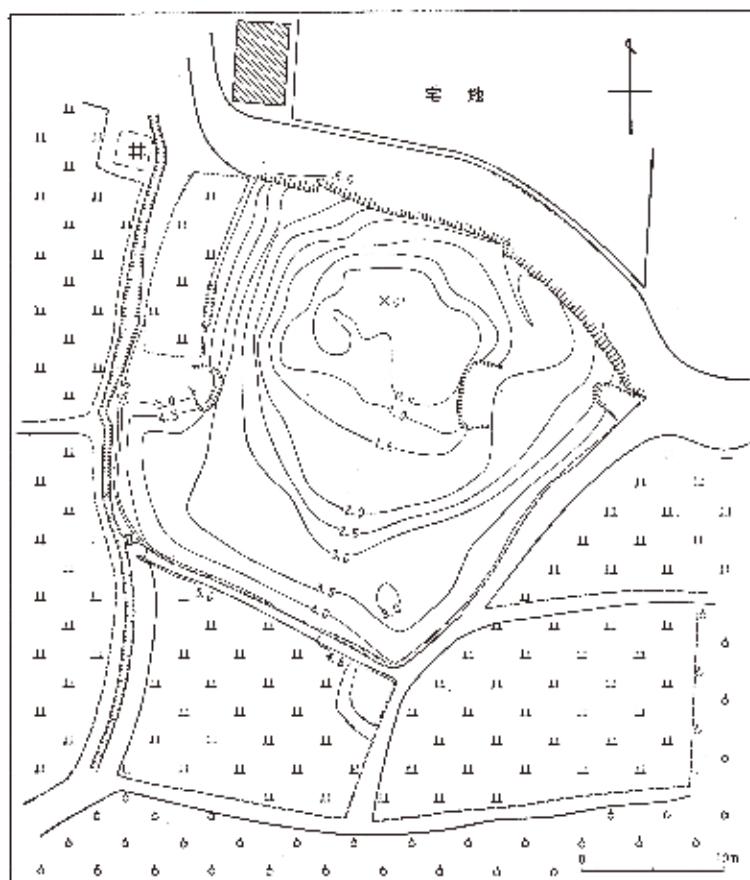


図64 左：シズカ塚古墳墳丘測量図（『奈良市史』） 右：シズカ塚古墳踏査記録（河内作図）

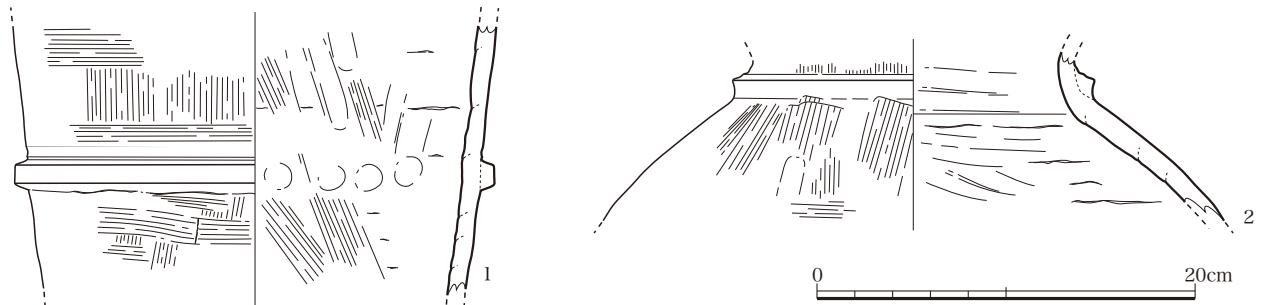


図65 シズカ塚古墳表採埴輪 1 / 4

る。

埴輪は表採時点では破片が17点あったが、多くの破片が接合し、特徴的な2点を図化した(図65)。他の小片もこの2点と同一個体であるとみられる。円筒埴輪(1)、朝顔形埴輪(2)がある。胎土はいずれも同様で暗褐色～黄褐色を呈し、黒斑がみられないことから窯窯焼成品である。胎土が類似し同一地点でまとまって表採されたものであることから、1・2が同一個体である可能性もあるが、ここでは一応わけて報告しておきたい。

1は、復元した胴部径が22.3～25.5cmで残高14.2cm、遺存率1/4である。外面はタテハケのちヨコハケ(4～5条/cm)で、一部に静止痕跡がみられるがBb～Bd種ヨコハケのような規律的なものではない。内面はタテハケのちナデを施しており、突帯位置の内面には連続する指オサエがある。粘土接合痕跡から約1～1.5cmの粘土紐を積み上げている。突帯は側面幅約1.0cm、高さ0.7cmで台形状を呈する。突帯の下端はほとんどヨコナデが施されず接合が甘い。突帯上端には貼り付け時のヨコナデの後についた横方向の擦痕があり、突帯間隔の設定に伴うL字形工具痕跡とみられる。

2は、朝顔形埴輪の肩部～頸部にあたり、復元した頸部径は19.0cm、残高8.9cmで遺存率1/4である。頸部外面に突帯を貼り付けた後、縦方向のハケ(4～5条/cm)を肩部に施す。下半にはわずかにヨコハケが観察できる。内面は横方向のナデが目立ち、粘土接合痕跡も比較的明瞭である。

2は最も肩部の張った部分での径が約33cmあるため、1と同一個体であるか確認はないが、1も比較的傾斜しているため下半部の破片であれば同一個体とみることも

可能である。

第3項 シズカ塚古墳の評価

シズカ塚古墳は、これまで時期や性格を特定しうる情報がなかったが、埴輪の表採によって中期古墳であることが判明した。

墳形は方墳とされてきたが、道路を含めた地割が円形を呈することなどから円墳の可能性がある。今回、墳丘斜面途にある平坦面で埴輪が表採されていることから、段築および平坦面に埴輪列がめぐる可能性が高く、今後発掘調査ができればその点を明らかにできる。

埴輪は、円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、窯窯焼成かつB種ヨコハケが確認できることから、埴輪編年IV期に位置づけることができる。ただし、突帯の形状や貼り付けがやや甘く、B種ヨコハケもベンショ塚古墳出土埴輪が明瞭なBb種ヨコハケであるのに対して粗い印象をもつ。のことから、ベンショ塚古墳出土埴輪より後出する可能性がある。

シズカ塚古墳は、前方後円墳であるベンショ塚古墳の南東約400mに位置するが、ベンショ塚古墳の北約300mには柴屋丸山古墳がある。柴屋丸山古墳は直径約32mの円墳であり、副葬品からベンショ塚古墳に後出する中期古墳であることが知られている。したがって、首長墳であるベンショ塚古墳築造後の5世紀中頃～後半に、衛星的に少なくとも2基の円墳が築造されたことがわかる。陪塚といえるほどの近距離でもないが、埴輪の胎土が類似することからも関連性のあるものと評価できる。今後の調査の進展に期待したい。

(河内一浩・村瀬)